

被災地の心霊体験を討論

地域の「拝み屋」に存在感



僧侶の対応事例も紹介されたパネル発表

日本宗教学会第73回学術大会（会場＝同志社大学）で13日、パネル発表「被災地における心霊体験とその意味について」が行われた。研究チームは予備調査を経て、心霊

現象に対応している宮城県内の宗教者を中心に聴き取り調査を実施。具体的な事例を集めて分析を加えた。

高橋原氏（東北大学）

は「宗教者による心のケ

アと心霊現象」を報告し、霊に関する相談を受けた僧侶の対応を分析。「受容」相談者の「霊に取り憑かれていく」といった感覚に基づく主張を否定しないで受け入れる「儀礼的対応」宗派で決まっているわけではなく、僧侶個人が経験的に身につけ、選択した読経等を行う「教育」霊による祟りという観念を否定して先祖供養の意味と大切さを教える」等を挙げ、「依頼者の宗教的世界観に寄り添いながら、依頼者自身が心身のストレスを受け止めることを援助する役割」をしていることを指摘した。

相澤出氏（医療法人社団 秋会岡部医院 研究所）は、心霊現象の相談相手として「地域の拝み

屋さんの存在感がある」と報告。地域に密着した宗教者の役割が大きいことを示し、「被災地で心霊体験をした人と出会うことは少なくない。決してちよっと変わった人が騒いでいるのではなく、被災地の中ではありふれたこととして考えなければいけない」と述べた。

大村哲夫氏（東北大学）は、臨床心理士として「カウンセリングにおける霊出現の意味」を発表。今年7月、宮城県内陸部の中学校が津波により多くの犠牲者が出た地域で宿泊学習を行った際、普段から霊感の強い女子生徒が「霊に取り憑かれた」事例を紹介した。

女子生徒は取り乱し、周囲の生徒もパニックになったが、担任教師も

「何かがいる感じがした」。担任教師は数珠を携帯しており、数珠を示すことで生徒を安眠させることができたという。同校では昨年、一昨年も同地での宿泊学習で類似した出来事があったといい、大村氏は「霊についてナーバスになっていたと考えられる」と原因の一つを分析した。